

# 新潟インターハイ 派遣報告書

令和3年8月18日(水)

報告者：隈元 ゆみこ

派遣期間：8月9日(月)～8月14日(土)

場 所：新潟県新潟市

## ◆審判会議及び審判研修会

8月6日(金) 19:30～20:30 Zoomにて実施

- ・審判会議(歓迎の挨拶、主催者挨拶、JBA 派遣審判員紹介)
- ・大会前研修

<研修1>「インテグリティ」 宇田川氏

審判員の安心・安全を。

コロナ対応について

インテグリティについて、男子大会では3件、UFは4つ

講義の取り扱いについて

クルーとしてしっかり対応、TOとの連携、最終的な判断は審判が。

周りの目 モラルを持った行動を。そして安全・安心に。

<研修2>「新潟IH 成功に向けて」 有澤氏

『処置ミスゼロに向けて、トラベリング、ショットの見極め(FUL)、RFG(含むインテグリティ)』

この4つを大会共有事項として取り組む。PGCにもトピックとして加える。

TOとの連携(ゲーム開始40分前にTOミーティング)

万全の体調で新潟入りを。コロナ等の対応により、変更等もあり得ます。

<諸連絡> 新潟県 石丸氏

輸送・宿泊・財務関係について

感染症対策について

クールダウンエリアについて

<その他> TO 講師 松永氏

TOの高校生たちが実技研修を十分にできていない中での大会であるので、多少うまくいかないこともあるかとは思いますが、TOも審判TEAMとしてよろしくお願いします。

TO主任の先生方は、男子大会から引き続き担当していただきます。

## ◆担当ゲーム

- 8月10日(火) 1回戦 倉敷翠松(岡山) VS 四日市メリノール学院(三重)  
CC:隈元 U1:吉田(石川A級) U2:河辺(富山A級)
- 8月11日(水) 2回戦 スタンバイ
- 8月12日(木) 3回戦 徳山商工(山口) VS 柴田学園(青森)  
CC:平澤(新潟S級) U1:隈元 U2:佐原(静岡A級)
- 8月13日(金) 4回戦 第3・4試合 スタンバイ(着替えて観客席 or 審判控え室に待機)
- 8月14日(土) 準決勝 京都精華学園(京都) VS 桜花学園(愛知)  
CC:尾形(長野S級) U1:小畑(福井S級) U2:隈元

## ◆PGC

<1回戦>当日、第一試合開始前に審判控え室にて

- ・事前に入手した両校の県総体映像から、いくつか気になるケースをクリップしたものを活用。(いくつか気になったケース、トラベリング、フォーメーション、キープレイヤー、メカなど)
- ・IH 審判研修でのテーマ、「処置ミス0、トラベリング、ショットの見極め、RFG」について。
- ・クルーワーク について
- ・TOとの連携について

3人で協力して、最後の0：00までしっかりレフェリングしようと確認して臨んだ。

<3回戦> 前日夜に Zoom にて実施。

- ・IH 審判研修でのテーマについて。
- ・『助け合いと協力』
- ・スピードアジャスター
- ・ミスが起きてしまったら、必ずクルーで情報共有
- ・アイコンタクト
- ・トラベリングについて、早い段階で。公平性

当日：映像にて確認

- ・3or2、トラベリング、バックコート2PO

<準決勝>当日、第一試合開始前に審判控え室にて

- ・前日のスタッツから、各チームの特徴やキーとなるプレイヤーについて。
- ・留学生に対するマッチアップ
- ・IH 研修テーマに沿って、映像を活用し、メカ等の確認。
- ・TOとの連携

## ◆TO ミーティング (40分前)

- ・お互いの自己紹介、役割
- ・TO 主任からの連絡(電光掲示等)
- ・オフィシャルチームとして、一緒に頑張りましょう。

## ◆ゲームの実際

<1回戦>

留学生を中心とする倉敷翠松のターンオーバーを誘い、ハーフコートゾーンプレスやゾーンから速攻などで作ったリードを四日市メリノールが最後まで譲らず、最後、留学生を中心に倉敷翠松も追いつきかけたが、結果64-61で四日市メリノール学院が勝利した。

ゲームの序盤からトラベリングの判定を入れていったが、最後まで足元のゆるさがあり、メッセージとして伝えきれていなかった。また、ハーフコートでトラップを仕掛けてくることに対し、特にCサイドで起こった際のローテーションのタイミングやCのポジションアジャスト、TとCでのチェックイン・チェックアウトなど、早い段階での対応が必要であった。終盤には対応していったものの、もう少し早い段階で対応できればよかったと感じた。

### <3回戦>

柴田学園の個々の能力と高さに対し、サイズの劣る徳山商工は、激しいチームディフェンスでしのぎ、オフェンスについても、うまい合わせのプレイで得点を重ね、ロースコアの展開に持ち込んだ。最大6点のリードを奪ったが、その後柴田学園に逆転を許し、3点リードで迎えた残り3.2秒で3Pシュートを決め同点。タイムアウト後、柴田学園のフロントコートのスローインから再開。最後は柴田学園のドライブからのショットが決まり、66-64で柴田学園が勝利した。

手に汗握る攻防が終始繰り広げられ、そんな中、早い段階でトラベリングについての判定などができたことはよかった。特に徳山商工のオフェンスの際のLのローテーションのタイミングが難しく、2回ほどメカが崩れそうになった。上手くバックペダルを活用することで、対応できた部分もあったのではないかと思う。また、ベンチへの対応として、いくつか気になるケースがあった。コミュニケーションを図ったものの、果たしてどうあるべきであったかということが残ったゲームであった。

### <準決勝>

序盤から両者一步も譲らない攻防が続き、一時桜花学園が6点差にリードを広げるも、京都精華が食らいつき、残り44秒を残して同点に。最後は、残り2秒でバスケットカウントを決めた桜花学園が、66-63で勝利した。インサイドの留学生に対する攻防がキーとなるゲームであった。3人がかりで守りにくる桜花学園のDefを3人で協力して捉えることができた。その中で、一試合を通して気になったのは、背中向けの留学生に対してのDefの身体の寄せ（足の出し方）であった。3Qで一つ笛を入れたものの、果たして前半はどうだったのか？ということが自分の頭の中に残った。また、留学生に対するDefやOOBの判定に対し、京都精華のHCのアピールがいくつかある中、2回目のOOBの判定に対するアピールに対し、CC任せになってしまった。ワンタッチがあったとジェスチャーはしたものの、もっとCCMを発揮して、自分自身ができたことがあったように感じた。TF後の処置については、クルーで分担してできたのでよかったと思う。

## ◆ゲーム後のクルーMTG

### <1回戦>

・メカが崩れたことに気づけなかった場面について、Lがローテしたことに気づけなかったことが原因。その後、どう修正すべきであったか。映像を見て確認しなければならない。

（後日、映像で確認。まずは、Lの動きが目に入っていなかったことが原因。その場での修正としては、気づいていた2人が、L→C、Tが逆サイドへ移動し対応するのがベストなように感じた）

・トラベリングについては早い段階から示していたが、両チームにメッセージとして伝えるにはまだまだしっかりと判定していくことが必要であった。

・フロントコートの高い位置かつCサイドで、アクティブになるケースが多く、TTLになる場面が多くあり、LのローテーションやCのポジションアジャストなどクルーでコミュニケーションを図り、だんだんと修正できたことはよかった。

### <3回戦>

- ・ポディーコンタクトの見方。まだ笛にしなくても良かったケースがあった。
- ・EOGの持っていきどころ。PrimaryはTなので、そういうところをしっかりと。見せ場。
- ・リードの位置がちょっと近いケースがあった。
- ・C4がよぎるケースでのクルーの準備やコミュニケーション。
- ・バックペダルをもう少し上手く活用したかった。そのためにメカの崩れが2回ほど。

- ・クルーで協力してコミュニケーションをとりながらできたことは良かった。
- ・徳山商工のHCへの対応について。(言葉)

#### <準決勝> IR: 関口氏より

- ・TFのタイミングについて。1回目のOOBの判定に対するアピールの際にワーニングできているので、2回目はそのままTFで。また、OOBの判定のプレゼン・デリバリーの工夫。言わせてしまう原因にもなっている。
- ・留学生に対するDefの手が気になった。最初から当てている。
- ・スローインの位置 ちょっとしたことではあるが、高さや左右で全く違って来る。もっとこだわって欲しい。
- ・声の使い方
- ・ハーフタイムで京都のHCとコミュニケーション。周りのことを考えると、桜花のHCとも同じようにコミュニケーション。(どういったことを話したかを伝えるなど。) 公平性。
- ・4Qでcallして欲しいケースがいくつか。クルーの頑張りどころ。
- ・リードの位置がクローズダウンポジションから始まっていることがほとんどなようで気になった。セットアップポジションとクローズダウンポジションのところでの動きを工夫することで、また違った景色があるのでは。映像等でまた確認してみたい。

#### ◆全体を通して

まずは、このコロナ禍で、2年ぶりにインターハイが無事開催されたことに感謝したいです。そして、私自身、昇格してから初めての県外派遣、初めての全国大会と、昨年1年間、ほとんど活動できなかったことで、かなりの不安と緊張もありましたが、出来る限りの準備をして今大会に臨みました。準備の甲斐もあったのか、自分自身が想像していたよりも緊張はほとんどなくコートに立つことができました。それは、一緒に担当してくださったクルーのおかげだと今では感じています。「気負わず、今の自分にできることを、クルーと共に、」ということをも自分自身のテーマとして今大会に臨みました。担当させていただいた3試合とも、最後まで勝敗のわからないゲームではありましたが、落ち着いてゲームを担当することができたことが自分にとっての収穫です。そして、その経験の中で、まだまだ足りないものが見つかり、今後の課題となりました。ちょっとしたことではあるけれども、そういう気づきをどう次に繋げていくか。判定面はもちろんのこと、ベンチへの対応やゲームコントロール含め、もっと勉強していかなければと感じました。そして、今回の経験を、地元に戻元していきたいです。今回の派遣で、久しぶりに全国の審判仲間と会うことができ、一緒に審判をし、いろいろな会話をすることができ、やはり現場はいいなと感じました。早くコロナが終息し、私たちが安全・安心に審判活動ができる日がくることを望みます。

今回の派遣にあたり、大変お世話になりました新潟県バスケットボール協会、新潟県高体連の皆様、また、参加に当たってご配慮いただきました原田審判委員長はじめ、鹿児島県バスケットボール協会の皆様に感謝し、拙い内容ではありますが、新潟IH派遣の報告といたします。ありがとうございました。